

大木茂（畜産経済学）、大倉健宏（社会学）

研究の背景

ウクライナにおける戦争をきっかけに、大部分を輸入に頼っている飼料穀物、肥料価格が高騰し、燃料価格の高騰もあいまって酪農経営や採卵鶏経営は危機的な状況に陥っている。同時に、世界的な鳥インフルエンザの流行は採卵鶏・ブロイラーの殺処分・出荷停止などにより日本深刻な不足も生じている。

この危機からの回復は、はたして元に戻る形でいいのだろうか？

今こそ、持続可能な社会を目指した酪農・採卵養鶏を追究することで解決を図るべきではないだろうか



北海道足寄町ありがとう牧場

アプローチ

SDG'sの視点からの新しい酪農 採卵鶏業とはどのようなものか？ 20代30代が魅力的に思える酪農・採卵鶏業について検討したい その際3つの動きから検討したい。

第1に、温室効果ガスの排出削減の生産方法

第2に、EUで持続可能な食料システムを目指し注目されている有機畜産

第3に、アジアでも取り組みが進み出しているアニマルウェルフェアの視点 である。

先進的に上記の取り組みを行う経営を訪問し、取り組む意義や問題点などを聞き取りながら（月に1回程度のフィールドワークをベースに）それを机上で全体の中への位置づけを行い、社会的な調査につなげて一般化のための課題を明かにする

期待される結果

日頃のちょっとした関心事が、世の中の経済活動、生産・消費行動とどのように関わっているのかが、具体的に理解できる。

現場を見ることで、方向性について現実的に理解できる。解決策を見出すことはそれほど容易ではないので、長期的な見通し構想力（世の中のつながりの理解）を養うことができる。



山梨県 黒富士農場

募集方法

申込期間に、教員(大木)にご連絡ください。研究の希望内容に応じて大倉先生と相談しながら具体的なテーマ・方法を決めていきたいと思っております。2人で申し込まれるとアイデアが出やすくなるのではと思いますがもちろん1人でも3人4人でもOKです。